

教育実習生の幼児理解に関する研究(Ⅳ)

—— 3年次実習における幼児観察レポートの分析を通して ——

○由田新・鴻俊子・森直美・権恵京・沈延慶・高橋貴志・近藤充夫・小川博久・井口太・岩立京子・栗原泰子
(東京学芸大学大学院) (東京学芸大学)

1. はじめに

この研究は、1988年度よりの継続研究であり、観察記録における実習生の幼児理解の実態を明らかにし、より効果的な指導方法や評価方法を検討することをめざしたものである。

さて、本学では3年次に、教育実習(9月)の前段階として観察実習(6月)を設けている。この観察実習は、文字どおり観察を中心にしたものである。そして、実習生は、観察者として幼児の行動記録をとり、それに基づいて考察することが要求される。このような作業を要求するのは、それが、実習生の幼児理解をより高めることにつながると考えるからである。

日常の保育の中で、保育者は幼児に対して様々な援助を行っている。この援助がより適切になるには、取り組んでいる活動における幼児の内面を読み取ること——例えば幼児がその活動をどうしたいのか、どういう課題を持っているのかということ——が重要となる。これが幼児理解である。一般的に保育場面における幼児理解は、直感に頼りがちである。こうした瞬時に感覚的に幼児を判断する力は幼児理解の上でも大切な能力であるが、同時に独断や偏見に陥る危険も持ち合わせている。保育者がより適切な援助を行うには、幼児についてのより客観的な把握とそれに基づく幼児の内面性の解釈が必要である。そこで、第三者的な見方(幼児の行動や会話を客観的にみつめる態度)が大きな意味をもってくる。「記録をとる」ことはその一方法である。

このように考えると、実習生にとっても実践経験の中で幼児の直感的理解を養うとともに、幼児理解をより確かなものとするために観察記録をとる機会をもつことは重要である。記録をとり、それに基づいて幼児の内面を考察するという作業を行うことでよりの確かな幼児理解が可能となるであろう。

2. 研究経過

・1988年度：従来から行ってきた記録方法での実習生の幼児理解の実態を明らかにした。

⇒ 実習生の幼児理解は、われわれの「記述分析カテゴリー(第41回大会研究論文集P686参照)」における「Ⅰ具体的記述」から「Ⅱ一般的傾向」のレ

ベルに止まるものが多く、質的にも両者の関連性が弱く直感的・短絡的なものが多い。

・1989年度：実習生が具体的記述(自分の記録)により密着した解釈ができるように①担任教師から抽出児についてのプロフィール、行動特性、遊びの様子等を書いてもらう(問題意識を持たせる)②記録時にいた状況・記録時の環境図を書く(状況との関連の中で対象をとらえる)という手立てを講じた。

⇒ (結果) ・具体的記述については、断片的な幼児の行動の記録だけでなく幼児の行動の流れが記録の中に見出されるようになった。
・一般的傾向については、具体的事実の裏付けを伴った長い時系列の解釈が増えた。
・記録方法の有効性が示されたが、プロフィールの中に幼児の行動や特性についての断定的な表現が用いられたものでは、それが考察の視点ではなく先入観になってしまい考察が歪められた例もみられた。

・1990年度：プロフィールの記述を検討し変更する。幼児の行動や特性を評価したり断定したりするような記述をさけて、幼児の前週までの様子・遊び方・友達関係・性格等を具体的事実に基づいて記述してもらう。

⇒ (結果) ・プロフィールが強い先入観となり、考察が歪められるような例は減った。
・プロフィールを観察の視点としつつも、あくまでも自分の記録にある事実に基づいて自分の考察を導き出す姿勢がみられた。
・一方、先入観となることを恐れるあまり具体的な行動のみが記述されたようなプロフィールの時に考察の視点が得られず断片的な記述となっているものも見受けられた。

以上、1988年度の研究から明らかになった実習生の幼児理解の実態に基づき、実習生の記録・考察をより深める方法を検討してきた。その中でもプロフィールの影響は、いい意味でも悪い意味でも大きいといえよう。先入観にならず、観察・考察の視点となりうるプロフィールはどのようなものかまだまだ検討の余地があると考えられる。

3. 本年度の研究目的

上述のような結果から、本研究の観察記録の有効性は示されたが、本年度は、プロフィールの書き方をさらに検討し、それによって実習生の幼児理解がより深まるかどうか明らかにしたい。

1990年度のプロフィールでは、幼児の行動や特性に対する評価や断定は避け、幼児の遊びの様子や友達関係など、担任に具体的な事実を中心に記述してもらった。しかし、結果として先入観となることを恐れるあまり具体的事実のみの記述になったプロフィールにおいては、逆に観察の視点が得られにくく記録・考察が断片的になる例もでてきた。一方1989年度のプロフィールでは、結果として評価的・断定的表現を含んだものもあり、そのような場合には、プロフィールに引きずられる例がみられた。これらの事から考えて、本年度は、幼児の行動についての具体的な事実と、その事実に基づいた担任の意見が述べられているようなプロフィールを担任に依頼した。そうすることによって、実習生はプロフィールに引きずられることなく、課題意識をもって記録・考察することができるのではないだろうか。以上のような仮説のもとにプロフィールの書き方の変更を担任に依頼することとした。

4. 研究方法

3年次観察実習における実習生の観察記録を分析することによって研究を進める。記録の様式及び分析の方法は、昨年と同じである（詳しくは1990年第43回大会研究論文集参照）。

(1) 観察記録の概要

- ①環境図を書き、幼児の行動と、教師を含む他児の行動について解釈を入れずに記録する。
- ②記録の状況に基づいて、記録の流れの中から幼児の実態について考察し解釈を加える（考察Ⅰ）。
- ③同じ幼児を観察した2人の実習生は、お互いの考察を話し合ったのち、担任からのプロフィールと自分たちの記録・考察を照合して両者の一致点・相違点を明らかにする（考察Ⅱ）

※今回の観察記録は、実習生二人一組となり、一人が記録をとりもう1人が遊びに関わる形でおこなわれた。

(2) 分析方法

- ①プロフィールの記述について、具体的事実とその事実に基づいた担任の意見が述べられているかどうかをみる。
- ②観察記録について、事実関係及び幼児の活動の流れや状況が全体を通してつかめるかどうかみる。

③考察Ⅰについて、考察が具体的な事実（自分の記録）に基づいているか、また考察に逸話性（一人の幼児の話としての流れ）があるかどうかをみる。

④考察Ⅱについて、プロフィールに対する一致点・相違点を具体的な事実をあげながら述べているかをみる。

5. 結果と考察

観察記録を分析した結果、結論からいうとわれわれの仮説は、今回の研究では証明されなかった。すなわち、プロフィールの変更にもかかわらず、実習生の考察Ⅱの一般的傾向としては、今回も、担任のプロフィールの記述に引っ張られて、自らの記録に基づいた実習生独自の考察にはなっていないことが明らかになった。特に、問題なのは、担任のプロフィールの記述を基準にして、それに合わせるような考察を行っているものがあることである。

このような結果となった理由としては、以下の事が考えられる。

①担任からのプロフィールの中の幼児に対する意見が幼児のパーソナリティの記述になっているものが多く、われわれの期待したプロフィール（具体的な行動場面に基づく幼児の行動傾向の読み取り）になっていなかった。

②担任に対して、プロフィールを書く意味、プロフィールのあり方についての説明が不十分であった。

③実習生の問題として、考察Ⅰにおいて、直観的・印象的な記述がみられた。この場合、考察が具体的事実には十分基づいていないため、考察の根拠が曖昧となりプロフィールに引きづられやすくなると考えられる。

その背景には、実習生の記録自体が不十分で幼児の活動の流れが読みにくかったこと、記録をとらないもう一人の実習生が幼児の遊びに関わるという記録形態をとったため幼児の普段の姿がとらえにくかったこと等があげられる。

④この観察記録の意味と方法についての実習生に対するオリエンテーションが徹底していなかった。についての共通理解を深めていきたい。

今後は、このような点を十分検討し、「幼児理解」についての共通理解を深め、より望ましいプロフィールを考えていきたい。